江戸川学園の創始者である木内きぬ先生が 66 歳の人生に幕を閉じた昭和 41 年、当時の江戸川学園新聞編集部が多くの方々にお話を伺いその生涯を振り返った記事が「江戸川学園の母 その生涯と足跡」です。原文のまま連載します。

# 生立ち

先生は明治三十三年九月三十日千葉県 香取郡大須賀村(現大栄町)伊能の長興 院と言うお寺さんの長女として生れまし た。父は原田顕光さん、母はまささんと いいます。当時はお寺さんと言うと地方 では裕福な生活を送って居り、先生も寺 男や女中さんにかしずかれながら育ちま した。

幼少の頃の先生は両親の愛を一身に受け、我儘いっぱいの生活を送られて居た。 とにかくオキャンでお転婆、近所の野山 を裸足で駆廻って居た。当時先生の特技 は木登りと駆けっこで、庭の真中にある 槙(まき)の木や山門などの高い処迄、登っ ては両親を困らせました。

村の尋常小学校二年の時、後年夫君となった栄三郎先生に教えを受けて居るということは人生の縁(えにし)であろうか。 その時、きぬ先生は級長でしたが、背が低いため椅子の上に乗り、クラスの号令をかけていました。

#### 娘時代

成人するに随って、書画・文芸に興味 を持ち、特に与謝野晶子に憧れて屋根裏 部屋(納屋のことらしい)で文学書を読 み漁(あさ)って居た。いっぱしの文学 少女気取りで、遠くローマの地へ行きたいと夢見て居た。この頃から大須賀村の三小町として、その美しさは近隣に聞えが高く、多くの男性の憧れの的(まと)であった。

紫の袴と頭髪に結んだ大きなリボンはこ の三才媛(きぬ・いと・ぬいの三人)だ けに認められた服装であった。

佐原の女学校を卒業すると村の小学校に 代用教員として奉職したが、この頃は、 護身用に針を一本身に着けて居ただけ で、自分の荷物を持ったことがなく、爺 やが後から荷物を持って従い、授業が終 るのを待って、また帰りに荷物を持って 寺に帰えった。

時には通勤途上、大須賀農学校の生徒達が、うら若いきぬ先生に対して、直立不動の姿勢で「敬礼」と掛声をして挙手の礼をされ、何度も赤面されたという。そしてこの頃は自分のことも女中さん任せで不自由ない生活を送って居ました。

#### 結婚

きぬ先生は村の小学校教員をしていた 頃、栄三郎先生は東京の師範学校在学中 で、夏休には郷里へ帰省し、母校である 村の小学校へ立寄り、そこで改めて、き ぬ先生と知り会ったようです。きぬ先生 はこの頃から他人の洗濯物もするように

なり、娘らしさが増して来たのです。 栄三郎先生は同じ村伊能の貧農の息子 で、栄三郎先生の兄がきぬ先生の家へ結 婚の申込みをした時、きぬ先生の御両親 は「顔を洗って出直して来い」と身分の 相違を指摘され、相手にされなかった。 そこできぬ先生は両親の賛成を得られぬ まま、大正七年伊能より上京し、東京田 端で新家庭を持った。郷里では栄三郎先 生の兄がきぬ先生の御両親へ毎日説得に 行きました。一方、きぬ先生の親友の一人、 斎藤さんもわが事のようにきぬ先生の実 家へ許しを願いに行かれました。又栄三 郎、きぬ両先生は裸一貫で上京して来た ため、苦難の連続でしたが、それを乗越 え、独立独歩自らの生活を築き、その甲

斐がありその後、勘当が許されました。 (昭和41年2月19日付「江戸川学園新聞第84号|転載)



# 学長のカレータイム ~ 「辛口(意見) 甘口(意見) どんとこい」~

「学生の生の声を聞き、更に充実した学生生活を送って欲しい。」と、昨年5月から小口学長は学生たちとのカレータイムを始めました。平成28年度は人間心理学科5名、現代社会学科5名、経営社会学科10名、マス・コミュニケーション学科6名、情報文化学科12名、こどもコミュニケーション学科12名、研究生1名の計51名が参加しました。

お昼休み、大勢の学生でにぎわう学生食堂でカレーを食べながら、趣味やサークル活動、地域自慢等の話題で盛り上がり、学長だけでなく参加した学生も、好奇心をくすぐられるような話題が出る一方で、「朝のスクールバスの本数を増やしてほしい」「学生組織が自由に使えるような部屋があるといい」「学内にATM がほしい」「実験室を充実させてほしい」等、学生ならではの意見もあり、学長と学生が江戸川大学を良くするにはどうすればいいのかと真剣に語る場面もありました。

本学をより良い大学にするために、辛くもよし、甘くもよしな学生の意見を学長はこれからも求め続けます。



#### ◎編集後記

あまり知られていない江戸川学園創始者の物語を今号から連載します。副学長の下平 先生から大変貴重なものだから大事に扱うようにといただいた創生期の江戸川学園新聞は 教職員や生徒の方々の活き活きとした姿が描かれていました。そのなかに江戸川学園の母 と慕われた木内きぬ先生の生涯がまとめられており、それはそのまま江戸川学園の物語で した。私学の存在価値が問われる今、建学の精神や教育理念が尊ばれ、再確認する時 期にきていると感じます。江戸川学園創始者の思いは今に脈々と受け継がれており、創生 記の物語を読むことは自分たちの今を理解することに役立ちます。どうぞお楽しみください。

# 江戸川大学学報

2017年2月号 第39号 Vol.15 No.2 平成29年2月1日発行

発行 江戸川大学 事務局 〒 270-0198 千葉県流山市駒木 474 TEL.04-7152-0661

第2回

江戸川学園の創始者である木内きぬ先生が66歳の人生に幕を閉じた昭和41年、当時の江戸川学園新聞編集部が多くの方々にお話を伺いその生涯を振り返った記事が「江戸川学園の母 その生涯と足跡」です。原文のまま連載します。

## 母の死

きぬ先生は大正八年二十才の時、 自らの母を亡くす事になってしまいま した。きぬ先生は、母の死の連絡を受 けた時、ふだん着のまま娘時代の手 提げを一つ持っただけで駆けつけまし た。先生は山門まで来た時、われを忘 れて大声で泣きました。

## 夫君の発病

結婚後、栄三郎先生は肋膜を患い、毎日薬瓶を持って多摩川へ行き、土手で保養をしていました。生活の主柱に倒れられたきぬ先生は、銀座の有隣生命保険会社に勤め、傍らタイプの技術を修得して家計を助けた。その後、やはり生活のため渋谷の九頭竜女学校の寄宿舎の夜警として学校に家族で住み込みました。長男一郎先生はここで、大正十年五月生れたのです。

住居を淀橋柏木に移し、「木内書房」 と称して、貸本屋を営み、また洋品店 などを営みながら、栄三郎先生の薬代 に当てた。

きぬ先生は夫君の健康恢復を待ちつつ、将来教壇に立つ準備のため、 小学校正教員の資格を取るための講習を受け修了し、大正十一年淀橋第二小学校に勤務しました。ところが同十二年九月一日、関東大震災の厄に会った。

かくてきぬ先生の献身的努力によって、栄三郎先生の病気もなおりました。 大正十四年、永住の地をこの小岩に 求め、新居を構えました。きぬ先生は 計画実行に対しては、ボーナスなど一 文も使わずに貯えていたのです。そし てきぬ先生は市川小学校に勤務しまし たが、次男和夫先生の出生(昭和二 年一月誕生)準備のため、退職して 家庭にはいった。

### 家庭の主婦時代

小岩に新居を移してからは、専ら家 事に励み、つかの間の平凡な主婦の 座を保ちました。栄三郎先生は昭和二 年日本大学高等師範部国漢科を卒業 し、中等教員の免許状を取得しました。 その後、栄三郎先生は四谷第五小学 校から本所中和小学校の教頭となり、 家庭では次女祥子(よしこ)さんが昭 和六年誕生された。

昭和十年二月一日、木内家にとってはよろこびにあふれた栄光の日であります。夫君栄三郎先生は四十四才の若さで本所緑小学校長に栄転されたのです。きぬ先生はどんなにか、夫の出世を楽しみにして働いて来たことでしょう。端祥あらわれてこの年四月、三男英夫先生(てるお、現理事長)が誕生されたのです。かくて、きぬ先生は三人の男の子と一人の女の子の母親として平和な日を過した。

### 運命のいたずら

本学園の全身は城東高等家政女学 校の名称で、昭和六年四月、松岡キ ン先生が創立し、昭和七年江戸川高 等家政女学校と改称したが、開設以 来苦難の道を歩いて十年、生徒の激 増は校舎の増築を余儀なくされた。そ れは昭和十五年九月末、小岩八丁目 にある白秋の居住跡を尋ねて見ようと 思い立った木内両先生はふと学園の 前を通りかかると新校舎は釘着けにさ れ建築主の名の許に売屋札が掲げら れてあるが、生徒達は旧校舎で依然 として授業は続けられていた。異様の 感に打たれたお二人は同時に、同じ教 育者の立場から松岡女史の心情に思 いを致し、暗然として「何とか方法は

ないものかなあ」などと語り合ったりした。それから幾日、売家札は取り去られて、新校舎に嬉々として学ぶ生徒達の姿を見るようになった。ほっとしたのも東の間の事で、学園の実権は買収者に移り、遂に実権者は学園を改造してアパートにすると言い出した。今まで育てて来た愛児をどうしても見殺しに出来ない。女史の苦悩は頂点に達したのです。

かくて白羽の矢が栄三郎先生に向け られた。先生は当時、本所で公立青 年学校長としての重責をになっていた が、教育者としての同じ立場から、女 史の苦衷を思い再三の要請に対して、 背を向ける訳にはいかなかった。そこ で栄三郎先生は女史と同道して同郷 の財閥で幼友達であった佐藤金属株 式会社々長佐藤保氏を訪問したので す。氏の回答は女史に取って冷厳そ のものでした。「木内君がやって行こ うというなら、その一族は皆教育者で あるから、将来に望みをかけて出資す るが… と言われ、後の説明を考えた 時、栄三郎先生は学園引受けは辞退 せねばならなかった。当時若手の校 長として都からも同僚からも将来を嘱 目されていた先生としては、公職を捨 ててまで学園に殉ずる気持はなかった が、時をうつせば学園はアパートにな るのです。女史は愛児の危急存亡の 時に当たってその再建をはかる決意を したが、女史と言えども、女なればこ のふん切りがつかず、学園の後継者 は栄三郎先生をおいて他にないと意を 決し、矢つぎ早に木内先生の門を叩き ました。かくて女史の熱と誠意はさす ががんこで通り、意志の人で通った栄 三郎先生を動かすことに成功したので す。幸か不幸か、運命のいたずらか、 遂にバトンは木内家に移された。

(出典:昭和41年2月19日付「江戸川学園新聞第84号」)



江戸川学園の創始者である木内きぬ先生が66歳の人生に幕を閉じた昭和41年、当時の江戸川学園新聞編集部が多くの方々にお話を伺いその生涯を振り返った記事が「江戸川学園の母 その生涯と足跡」です。原文のまま連載します。

かくて栄三郎先生は二十有八年という教育者としての公職に終止符を打たねばならなくなり辞表を提出し、昭和十六年五月六日(五十才)本所第三青年学校長を退職し、その前日付で正七位高等官六等に叙位叙勲されたのです。

4

同十六年五月三十日、江戸川高等 家政女学校の第二代の校長に就任さ れた。しかしこの陰には栄三郎先生が 私財を投じての自力自営、女子教育の 先駆者として涙ぐましい努力があった のです。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦 争が勃発し、未曽有の困難に際会し、 挙国一致の体制の尽忠報国滅死奉公 の精神を発揚することとなり、戦争が 激しくなるにつれて、人手は不足して 来るし日本は押され勝ちになって、学 徒はどんどん前線に繰り出される社会 情勢となって、栄三郎先生は漸く意を 決して、本学園の生徒を工場に送った のでした。それまで校長は動員を拒み 続けて来たのでした。先生方は工場 から工場へ、生徒達を見舞って歩く、 動員中亡くなられた生徒もあり、まと もな授業は受けられなかったその頃の 生徒達に比べて、今の生徒達はなん と恵まれていることでしょう。

超えてきぬ先生は昭和十九年三月、 国語科講師に就任し、直後に女子教育に当られました。一方一郎先生は青山師範を卒業し、北小岩国民学校に奉職したが、昭和一七年一月、佐倉五十七連隊に入隊し、満州へ出征し、幹部候補生に合格し、豊橋予備士官学校卒業後同十八年黒河省孫呉部隊に派遣、北支各地に転戦し、予備陸軍中尉に任官して復員されたのが同二十年十一月であります。その後、東京高師に入学されましたが、その間本校教諭に就任せられた。

同二十年三月きぬ先生の実弟である本校財団理事原田顕正氏が横須賀 山武海兵団で戦死された。

# 夫君の闘病

学園の理事長、校長を八年間に亘り、栄三郎先生が経営をしておりましたが、戦後間もなく疲労のため病いを再発し病床に伏すこととなりましたので、昭和二十三年十一月きぬ先生は理事長代理に、一郎先生は校長代理に就任しました。毎日学校に通い、帰り道は買物をし医者に立寄り、栄三郎先生の薬を持って帰宅し、夕食の仕度やら子供の洋服なども修理し、夜遅くまで働いた後、学園の出来事を病床の夫に報告しました。

## 夫君の死亡

その後同二十六年三月、財団法人 江戸川高等女学校を私立学校法に基 き学校法人江戸川学園に組織変更し ました。栄三郎先生は遂に療養看護 の甲斐もなく同二十七年一月五日、死 去されたのでした。その時に、栄三郎 先生は「私の亡き後、学校を人に渡し て、平凡な道を歩んで欲しい」と言い 残しましたが、きぬ先生は、夫君の生 涯をかけた学園なので、夫君が息を引 きとる直前「学園は続けます」と涙な がらに決意を述べたのです。

### 理事長就任

きぬ先生は、校長を長男の一郎先 生に任され、御自分は理事長として学 園を引き継ぎ、学校再興に専念せられ た。

### 校舎の鉄筋化

きぬ先生はこれ以後十年間は校地の拡張と校舎鉄筋化計画実現の明け暮れでありました。かねてから校舎鉄筋化を夢見つつありました。昭和三十一年度の卒業生五十嵐伏子さんが主となって、編集部員が作り上げた苦心の模型が出来て、玄関に備えつけられた時、生徒達はドリームと名付けたが、学園の財政面ともにらみ合せ

て、八ヶ年の歳月をかけて、五期に分け三階建鉄筋化への計画が成立したのです。それ以前、小岩駅北口にあった東京学園と江戸川学園は女性が経営しているのであるから、いつつぶれるかわからないとの世間の評判、そこできぬ先生は立派な講堂を建て世間をあっと言わせました。次にはこのドリーム実現の苦難の道が始まったのです。昭和三十二年、夢であった鉄筋三階建の工事が始り、同三十三年七月第一期のドリーム実現化の第一歩を印したのです。

Ъը

この間において悲しい訃報が学園に もたらされたのです。即ち初代校長の 松岡キン先生が同三十二年二月十五 日八十五才の長寿で亡くなられ、続 いて同年四月四日勤続二十三年といわ れる功労者杉浦ちづ先生(旧藤吉氏) は不帰の客となられたのです。学園で は、運命は不可抗力であるが、不幸 の連続は必ずや人々の結集の力により 打開の道もひらけるだろうとの信念に 依り、同年七月二十日、学園の柱石と いうべき松岡キン、杉浦先生及び故人 となられた職員十五名、同窓生四十三 名の合同慰霊祭を執行したのです。

次いで三十五年一月、同三十六年 十一月、同三十七年一月と第四期工事 が完成し、第五期の特別教室三が本 館続きの東側に完成して昭和三十八 年十一月、待望の鉄筋化のドリームは 夢ではなく現実に実現せられ、白亜の 近代校舎の偉容を仰ぎ見る事となっ た。きぬ先生のよろこびはどんなで あったでしょう。第五期工事完成の落 成式が盛大に挙行されたのです。

- ○越えて来し工事現場の六ヶ年 式 辞に読めば胸せまり来る
- ○黄泉に便り届けん術もなし遺業を継ぎて十二年経ぬ

(昭和 41 年 2 月 19 日付「江戸川学園新聞第 84 号」転載)

19 江戸川大学学報第16巻2号 (通巻41号) Edo Letter



江戸川学園の創始者である木内きぬ先生が66歳の人生に幕を閉じた昭和41年、当時の江戸川学園新聞編集部が多くの方々にお話を伺いその生涯を振り返った記事が「江戸川学園の母 その生涯と足跡」です。原文のまま連載します。

# 歌人として

きぬ先生は女学校三年生から作歌 され、精進を続けたので、晩年にはそ の歌風は、すでに一家の風格をそなえ られています。

歌人としての木内きぬ先生こそは、 その本領とするところであったと思われます。その歌人としての足跡を少し く述べ、その作品を通してその人間性 の一端をもうかがうこととします。

先生の第一歌詩集「かたばみ」(昭和三六年一○月一日発行)一巻は昭和二十七年から昭和三十六年にかけての作品であるが、いずれも芸術性豊かなすぐれた珠玉であり、その一首一首に胸打たれるものがあります。森脇一夫先生(街路樹の主宰者)が序文の中で『木内さんは初めは与謝野晶子や吉井勇の影響を受けられたそうであるから、そうした新詩社風の薫染はぬぐいがたいが、しかし、現実を見つめる眼も確かなものがあって、しばしば注目すべき作品をものしている云々』と述べ、次の歌を抄出しています。

- ○病む鶏を籠に移して置きたれば死に際 に卵を一つ生みたり
- ○屋上に一人の時を求め来ればここにも 白日がぢりぢりと照る
- ○自らの手にしたためし墓標にて茂吉の 墓とのみ彫みあり
- ○移し植ゑし山茶花の根つき危ふけれど 季くればはや紅き花をつく
- ○電気釜湯気立ててをり壁際に薪積みし ことも過去となりつつ
- ○表情も動くことなく手術進む外科医は 命を託されてゐて
- ○開腹のメスの音さへ耳にして腸引きつ るる瞬間を堪ふ

『これらの作品が、木内さんのそのときどきの感懐を秘めたものであることは言うまでもないが、わたくしは、このさりげない表現のなかに、かの女の形式にとらわれない、地味で謙虚な人がらの見いだされるのがおもしろいと思う云々』と評されております。

先生は季節の推移や自然に対し或

は人生や社会に対して常に凝視の眼を向け、真実の追求をされ、端的にその感懐を吐露するなかに何か自然の理法といったもの、或は極めて人生的な考えを内容に沈潜されているという作品が多いようであります。

歌集から随時好きな歌、佳調と思われる歌を抄出し、その歌風をうかがい、 また作品を通してきぬという人間の心 の姿にふれたいと思います。

- ○荒野来てかたばみ草の四つの葉を探し き若き日の理想像
  - 註「かたばみ」は本校の校章です。
- ○京極の夜を歩めばこの子らは欲しいものばかりと嘆きを洩らす註中学三年生の修学旅行風景
- ○撒き水に散りて凍てつく竹の葉を踏み て年賀の人訪づるる
- ○一鉢の蘭を求めて愛でむとす片割れの 身のわびしさにゐて
- ○アカシヤの花散る道を子等と行く若きに似たるはなやぎもちて
- ○寄り添ひて寡黙の時を持ちし丘ひとりを来れば遥けしその日 註「故郷」の題、夫君追慕の情切なる ものあり、人の胸を打つ。
- ○三階の屋上に立つ視界にて富士西空の 遥かにかすむ
- ○寄りて来る人あり去りて行くもあり我 のみはいつまでも同じ椅子
- ○夫よりも生き伸びて来て十指数ふ厳し き座にもフリヂア匂ふ
- ○狐に生れて狐に帰る日のいつか来む子 への形見の書かく夜更け

きぬ先生は歌の修業に就いての回顧を次のように述べております。『戦時中、今井女史の門をたたき直接先生の指導を受けました。アララギ系の先生の作風と私の作風とはひどく隔たりがありまして、酷評やら厳しい御叱りやらを戴いていましたが、先生はいつも必ず朱筆で懇切丁寧に講評し、添削をしてくださるのでした。先生故人(昭和二十三年七月歿、五十七才)となられた今となってはその朱筆が大へん貴重なものとなりましたが、惜しいことに戦争で紛失してしまいました。

戦後、今は亡き夫の勧めで、森脇先生の傘下に入れていただき、ずっと今日に及んで「街路樹」同人に加えていただいております。』と。その後、昭和二十八年ごろ、隣人の勧めで、「覇王樹」に入社し、松井如流、飯田莫哀両氏にも指導を受けられたようです。昭和三十三年頃、森脇師の推薦で日本歌人クラブの会員ともなり、その「年刊歌集」にも自信作を寄稿しています。

きぬ先生は夫君栄三郎先生と死別 し、個人の偉業を受け継いだ江戸川学 園も創立三十周年を迎えるに当り、こ の辺でひとまずピリオドを打っておき たいという意味で歌集一巻「かたばみ」 を刊行され、これを故人の霊に捧げた のであります。理事長という職にある 関係上その両立はなかなか困難なこと であったようですが、短歌を自分の心 の支えとし、また教育の上にもこれを 生かされました。結局、短歌は抒情詩 であるので、ローマン派から入っても、 またアララギ派から進んでも究極にお いては同じようなものとは思われます が、その短歌修行の道程においては多 少の困難はともなったでしょうが、大 いにプラスになった点もあったと推察 されます。

また北原白秋が大正五年、市川真間から小岩村小岩田の三谷(さんや、現江戸川区小岩町八丁目)の江戸川畔に移り、地蔵橋のたもとにあった家の離れ座敷で、これを「紫烟草舎」と名づけ、ここで「葛飾小品」や「雀の生活」などを物したゆかりの文学遺跡でありますので、それを記念して、地元の人々と、昭和三十六年四月十六日、同小岩井町八丁目の八幡神社の境内に白秋歌碑を建立し除幕式を行ったのであります。

いつしかに夏のあわれとなりにけり 乾草小屋の桃いろの月 白秋

註、この歌は白秋の筆跡ではなく、 「田沢匏生」である。

(出典:昭和41年2月19日付「江戸川学園新聞第84号」)

<u>Edo L</u>etter



江戸川学園の創始者である木内きぬ先生が66歳の人生に幕を閉じた昭和41年、当時の江戸川学園新聞編集部が多くの方々にお話を伺いその生涯を振り返った記事が「江戸川学園の母 その生涯と足跡」です。原文のまま連載します。

先生はこの歌碑建設記念短歌会を 契機とし歌話会を組織し、年刊歌誌 「江流」を発刊し、また同年頃、江 戸川短歌連盟(現理事長石橋源太郎 氏)を結成し(会員五十余名)その 大会を開催し、また区の文化祭の行 事にも参加しました。その歌会は多 く本学園が会場として提供されまし た。先生はその役員(理事)となり、 また所属のこの歌話会を江戸川短歌 会と改称し、その会長となり活躍中 でありました。

Ъ

昭和四十年十一月十四日開催の江 戸川短歌連盟五回大会(第十三回 の区の文化祭参加)は先生の最後と なったののですが、その際、作品互 選の結果、次の先生の歌は最高点に 近い点に入りました。

放ち矢に似たる二千の眼に向ひ就 任の声ためされてゐる

立派な歌で、格調もしっかりした 風格ある歌であります。この歌は校 長就任の際、生徒に挨拶された時の 感懐を述べた歌であります。

きぬ先生はその時々の短歌を所属 の歌誌は勿論、学園新聞や短歌新聞 や私学新報などに寄稿せられていま した。その文章も光彩を放っており ました。

「かたばみ」以後の作品は第二歌集となる程の数にまとめられています。

昭和三十六年拾遺抄

- ○未解決のことにこだはり帰へる道 上弦の月は鋭角を持つ
  - 昭和三十七年八月以降抄
- ○風吹く向きに従ふ草原の眼の果て にして浅間の裸肌
- ○こほろぎの鳴く音休止符なき夜を 子が買ひくれしマットレスに臥す
- ○蒼すだれ巻かねばならぬ季の推移意識に重く靴はきて出づ

- 瞑想の一時もてば諸々の声なき声 す此の座久しき
- ○自らを亀裂におきて柘榴の実風に 堪へつつ粒をのぞかす
- ○物言はぬ獣どもにもの言ふを習は しとなりて明けくるをゐる
- ○人間の行衛示唆して窓越しに墓地 の広さがしゞまにおかる 同三十八年以降抄
- ○潮騒の音ひたひたと迫り来て孤愁 に立てば海猫の鳴く
- ○息つまる会合の座にしびれゐて救 ゐとならぬ電話呼び出し
- ○命ならづ届出のかたちとられたる退学の子に詫び度き心
- 崩れ落ちん崖を支へて木の根っ 子自らも生きをり網羅となりて
- ○十七万の死霊の化身思はせて血の 滴りに仏桑華咲く(沖縄)

同三十九年以降抄

- ○白鳥は芦の湖面に点在しまづ平穏 に元日の朝
- ○双子山鉄塔寒く空を指す我生き様 の厳しさに似て

スイスにて

- ○高層のホテル昇降もいたはりあひて異国巡礼国越えてゆく
- ○大いなる創作品を据ゑしがに氷河 はりつくモンブランの山
- ○凍て雪は小出しに解けて山降る水 は奔流となりて真白し
- ○愛の花エーデルワイスに香水を添 えて売りをりスイスの少女 同四十年以降抄
- ○さんざしの赤き実垂れて冬日にぶ し去りゆく友をとゞめがたくて
- ○霜よけのかげに咲きゐし福寿草卓 に飾りて子の結納を受く
- ○受け継げし血潮に今は輸血して 四十四年の命喘へぐ子
- ○力抜きて肩をさすれば母と子の沈

黙に時はゆるく過ぎゆく

- ○母情さへ今は及ばずすさまじき音 たつ火陥昇天の刻
- ○逝きてよりむしろ近づくほ、ゑめ る遺影にひとりのものを言ひをり
- ○放ち矢に似たる二千の眼に向ひ就 任の声ためされてゐる
- ○年賀状にかへて我がかく喪のハガ キ机上に高く年暮れてゆく

以上の作品はきぬ先生の歌風をう かがうに足るものと思われます。先 生は漢詩の朗吟や短歌の朗詠も巧み であった。なかでも書道は幼少の頃 から父の資質を亨け巧みであり、自 作の歌を色紙にうるわしく染筆せら れ、水莖の跡見事なものがありまし た。しかしこの陰には絶えざる努力 が払われていました。佐原高女時代 の恩師鈴木董先生(現富士見高校長、 号梅渓) の指導感化がその鍵となっ ており、晩年まできぬ先生の作品を 鈴木先生が色紙に書かれたものを手 本としてその技を練られたようであ ります。先生は歌によって生涯を支 え、その教育的信念を培われたので あり、歌が上達するにつれて、先生 その人に輝きが出て来たと思われま す。そして死のまぎわまで歌を棄て なかったのです。

(「街路樹」二月号の絶唱及び森脇先 生の追悼文参照)

今、きぬ先生の歌人としての情と 熱とを持ったその人柄を偲ぶととも に、先生の急逝が誠に惜しまれてな らないのです。

(昭和41年2月19日付「江戸川学園新聞第84号」転載)

23 江戸川大学学報第17巻2号 (通巻43号) Edo Letter



江戸川学園の創始者である木内きぬ先生が66歳の人生に幕を閉じた昭和41年、当時の江戸川学園新聞編集部が多くの方々にお話を伺いその生涯を振り返った記事が「江戸川学園の母 その生涯と足跡」です。原文のまま連載します。

# 歌人として

きぬ先生はかねてからの父の生地一祖先境墓の地を自分の目ではっきり見届けたいという念願を持って居りました。昭和三十八年五月三男英夫、山脇完さんらと東京駅を夜行で出発し、京都で乗替え尾道で下車し、汽船で忠海(ただのうみ)に行き、ハイヤーで父原田顕光の生地三原市在の小泉村へ向かった。続く山々を越え峠を下ったのであるが、その昔、父が故郷をあとに行李をさげてとぼといた思い出の山河なのです。きぬ先生はなつかしいこの村の風物に接し、父をなつかしんだものです

- ○行李一つ持ちて故郷を出でし父千 葉に住みつきて我等を生めり小泉 村の原田富太郎氏(養子、現教員) 宅がそれで、農家であり昔は庄屋 などもやられた旧家である。同廿 二日ここで一泊され、一晩、家人 と語り明かしたのです。
- ○父生れし家は藁葺きの主家にて芍 薬の花咲きさかり居り
- ○幼き日父のつけたる手垢など染み てもゐむか柱なで見る

翌日一行は車で三原市に出て、汽車で広島へ向かい、同市内を見物し、厳島に渡り岩惚旅館に一泊しました。翌日広島から飛行機で大阪へ。有馬温泉に一泊して、翌二十五日大阪伊丹飛行場を出発し一路帰京して、思い出の父の郷里広島訪問の旅を終わりました。

## 尾の道

○積雪はそのまま解けぬ様なして除 虫菊の花一山を蔽ふ

きぬ先生は大正十四年自宅を小岩に新築してから既に三十有八年を 経過し、家屋も老朽化したので思い 切って、昭和三十八年二月旧居を解 体し、近代様式の和洋折衷の二階屋 を建築することを決意し着手しまし た。半年ばかり不自由な生活を学校 の書院に送り同八月未完成の家に引 戻り、その年完成しました。二百坪 余の庭内に一階四間、二階二間、建 坪は延四十二坪あります。三男英 夫夫婦と三人で住まわれていまし た。奥庭には種々の庭木を配し、四 季折々の草花を咲かせて眼を楽しま せ、また家畜類を好んで猿・犬・猫 などを飼育され、歌作のよき素材と なりました。

旅を好むきぬ先生は北は北海道、東 北地方、西は近畿地方から四国、九 州を極め、同三十八年八月には珍し く一郎先生とともに沖縄へ視察旅行 に出かけられ、ひめゆりの塔にぬか づいては戦禍の跡を弔らいつつ各地 を巡って帰京せられました。旅のあ れこれは、欧米・近東・ソ連などで ありましょう。

# 欧米視察旅行

女学校時代からの憧れであった ヨーロッパ旅行をきぬ先生は実現す る時が来ました。東京都教育信用 組合第二次欧米視察団主催の一行 二十名に加わり、昭和三十九年七月 二十二日から八月十九日に至る約一 カ月の日程で羽田空港を国際線スカ ンジナビア航空にてアラスカのアン カレッヂを経由してデンマークに入 り、次にドイツ、スイス、イタリア、 フランス、オランダ、イギリス、ア メリカと欧米八か国をつぶさに視察 し、ハワイを経て海外旅行を終わり 同八月十九日無事帰国されたのであ ります。この紀行文は所々写真を揚 げ随所に珠玉の短歌作品を挿入して 「巽国巡礼」の一書として刊行される 日も近いことでしょう。その折、国々 での 目の歌を数首紹介しましょう。

#### コペンハーゲン

- ○惜しみ来て日本時刻を此処に捨つ 時差調整の時計まきをり
- ○一つ場所を行きつ戻りつ守衛兵漫 画めきたり王城の前

#### ベルリン

○渦巻きて厚きバリケードそれさへ も超えゆく人のあえなき命

#### チューリッヒ、ジュネーブ

- ○水蒼きチューリッヒ湖を俯瞰して ケーブルカーは悠々とゆく
- ○モンブランの山は偉なりき大なり き三十一文字をはみ出してしまふ

#### イタリア

- ○紀元前一世紀の文化伝えゐるボン ベイ廃墟の烈日をゆく
- ○憧れは久しかりしよナポリの海 南欧熱海と人の言ふなる

#### フランス

○マロニエの並木歩道をそぞろ行き て凱旋門のアーチを仰ぐ

#### アムステルダム

- ○異国人の血のぬくもりよ手を貸し て下車支えくれるアムステルダム
- ○茫然とつづく草原に風車ありゴッ ホを生みし地に佇ちてをり

#### イギリス

○ ラワンの実赤くたわわに熟れてを ロンドン郊外人気なき家

#### ニューヨーク

○ハドソン河鈍く光れり高層の窓に より添う我影小さく

#### ワシントン

○ケネディの墓地の林に棲むリスの 石かげにひそみ気配伺う

#### シカゴ

○満月の夜に国出てて三日月に雲の かかるをシカゴにて見る

(出典:昭和41年2月19日付「江戸川学園新聞第84号」)



江戸川学園の創始者である木内きぬ先生が66歳の人生に幕を閉じた昭和41年、当時の江戸川学園新聞編集部が多くの 方々にお話を伺いその生涯を振り返った記事が「江戸川学園の母 その生涯と足跡」です。原文のまま連載します。

#### 一郎校長の死

ф

昭和四十年四月、三男の英夫先生 が結婚され、母親として、わが子の 前途を祝福したのも束の間、長男一 郎校長が病に倒れました。きぬ先生 は病床の一郎先生の見舞いと懸案待 望の体育館工事の進行、校長の任務 の代行と多忙な日々を送られました。

一郎先生は、三か月の入院闘病生 活、親近者の看病、職員生徒の献血 もむなしく、体育館の完成も見ずに、 七月十三日、遂に四十四才の壮齢を 以て自宅で死去されました。学園の 発展のために、多くの困難を共に乗 り越えて来た息子に先立たれたこと は、きぬ先生にとっては大きな衝撃 だったと思います。一郎先生の学園 葬の時には、息子に先立たれた母親 の悲しみを和歌に託された。

# 老骨に鞭打って

一郎先生の死後、関係者の説得で、 きぬ先生が理事長と校長を兼任する ことになりました。二つの要職を兼 務することは大変な劇務ではありま すが、先生は自ら職員の先頭に立ち、 公務の全般をとり仕切りました。こ うした忙しい中でも先生は生徒と接 することを楽しみに、自ら進んで教 壇に立たれたのです。

この頃からきぬ先生のお顔には疲 労の色が目立って来ました。周囲の 人々の心配をよそにただ学園のため にと、老いた身体を鞭打ちつつ働き 続けられたのです。十一月十六日夜 中に第一回発作に襲われ苦しみまし た。そしてそのまま気を失い、翌日、 目が覚めた時、生きて居るのが信じ られなかったと話されました。しか

し学園にとって大切な時期だからと、 次の日には、学校で仕事をされ、身 体を休める時もなかったようです。

ե

一郎先生の死後、きぬ先生は、学 園の将来を案じ、後継者の育成と言 う、経営者として一番難しく大切な 問題に取組みました。友人知人等に もいろいろ相談しながら、その実現 を楽しみにして居り、又隠退して歌 誌を主宰しながら、好きな動植物の 世話をして余世を送りたいとも話さ れて居たそうです。これ等の夢は現 実しないまま先生はこの世を去りま した。

(出典:昭和41年2月19日付「江戸川学園新聞第84号」)

荒野来て

かたばみ草の

四つの葉を

さがしき若き

H

 $\ddot{o}$ 

連

短像

成瀬江雲書 木内起ぬ詠

(印は三

郎

荒墅来天

可たは三草の

四つ能葉越

さ可し支若き

日農理

想像

赤字は変体仮名

(写真右の短歌

TEN MY Sagar N A 1000

図書館内常設展示

荒野来てかたばみ草の四つの葉を探しき若き日の理想像

木内起ぬ かたばみの葉群にまろび頬染めておゆびからませしことの思ひ出 (きぬ) 先生の歌集「かたばみ」の巻頭の歌。 この歌に続

うにクローバーと同じで四葉のかたばみもあり、 れるがこちらは白い花を咲かせる。 合わせた形で黄色い花を咲かせる。 一首が載っている。 かたばみの校章つけし生徒等は入り代り立ち代りしてすでに三十年 「かたばみ」は葉がハート型で三枚が尖った先端を寄せ 歌に よくクローバー 「かたばみ草の四つの葉」とあるよ 見つけると (シロツメ草) と間違わ 「幸運が訪れる

常に自分の心を磨き続けて欲しいとかたばみに思いを重ねたのである。 かたばみ」の葉は、 る。 かたばみの葉は、 併設校の江戸川女子中学・高等学校の校章になってい 古人が日々銅鏡を磨くのに用いた。 子どもたちにも

夢の実現を願って四葉のかたばみ草を探した時のことを思い起こしての作で

夢が叶う」

と言われている。

歌は、

きぬ先生が若い日に

「教育の道」という

江戸川大学名誉教授 江戸川大学オープンカレッジ書道講師 下平武治監修 村竹恵子著

※左の短歌は次号掲載

木内起ぬ先生の詠まれた短歌の額について



江戸川学園の創始者である木内きぬ先生が66歳の人生に幕を閉じた昭和41年、当時の江戸川学園新聞編集部が多くの方々にお話を伺いその生涯を振り返った記事が「江戸川学園の母 その生涯と足跡」です。原文のまま連載します。

# 死の前後

先生は、ヨーロッパ旅行記と学園の歴史を書かなければと口癖のように話して居りました。二学期の終業式を済ませた先生は十二月二十五日、静養を兼ね原稿を整理するために熱海に行かれた。

梅園ホテルという静かな宿で、午前中は梅園等を散策しながら原稿を執筆されて居りました。十二月三十日、午前一時ころその「異国巡礼」を執筆中、第二回目の発作を起し、四時間に亘って苦しみました。自宅に電話が入り、家族のものが熱海に駆けつけました。しかし発作はもう止んで居たが、大変疲れて居る様子でした。

先生はその時「胸に幾つか石が つかえて居るようでとても苦しかっ た。又右手がだんだん冷えて効かな くなった。物を書き過ぎたのだろう」 と話されたそうです。次の朝、熱海 の病院で、精密検査を受けましたが、 心電図、血圧、共に異常はなく過労 という診断を受け大事をとって大晦 日の晩は熱海へ一泊しました。翌元 旦の朝は大分元気になり、自分で支 度をされ、お昼前には旅館を発ち、 途中藤沢で親友の志村久子宅を訪問 して、新年の挨拶を済まされ、午後 三時頃自宅に着きました。一週間ば かり家を空けて居たので家に帰った のが余程嬉しかったのか、お土産を 動物達一匹づつ配り、話し掛けて居 りました。顔色は疲労のため余り良 くなかったのですが、三時間程休ま れた後、夜は遅く迄、親戚の人達と 談笑して居りました。二日の日は朝、 普段と変わらぬ時間に起き、熱海で 集めた草木を庭に植えたり、鉢に整 理したりして過されました。

午後四時三十分頃、親戚の方々を玄 関まで見送り、年賀状の整理をして 居りました。特に中学の生徒から戴 いた芋版の年賀状が楽しみだったの か大切に集めて、学校で展示するのだと楽しみに語って居りました。午後五時過ぎ家族と一緒にお茶を飲まれ、愛猫"デボ"の手を持って「お散歩、お散歩」と笑いながら歩かせて居りました。先生は午後六時頃、入浴して心筋梗塞のため急逝されたのです。享年六十六才。

日頃から苦しまずに死にたいと、 口癖のように申して居りましたが、 生まれたままの姿で全然苦しまずに お亡くなりになったそうです。

# 苦しみの雨に送られて

昭和四十一年一月四日、午前九時から自宅で密葬が執り行われました。 先生を敬慕する会葬者が陸続きとつめかけ庭にあふれる程でした。式が始まる頃から雨が降り出しました。 お棺の中の先生は薄化粧の下で微笑をたたえられ、生きて居る時と全然 変わらない美しいお姿でした。出棺の時には雨は一層、激しさを増し豪雨となり、正月には珍しい雷雨も聞えました。自然もきぬ先生の死を悼んだのでしょうか、雨が先生が再び瑞江の火葬場からお家にお帰りになられた時は止んで薄日が射していました。

そして今日二月十九日、学園葬を 行うに当り、長年月学園に身を捧げ られ、その礎石となって今日の学園 の隆昌をなさしめた、この偉大な先 生の功績を賛えると同時に、その遺 徳を偲び、その心を心とし、江戸川 学園の明日へのよりよき教育のため、 教職員協力一致邁進を続ける覚悟で あることを先生の霊前にお誓いする とともに先生の御冥福お祈り申し上 げます。

(出典:昭和41年2月19日付「江戸川学園新聞第84号」)



江戸川学園新聞 第84号 「学園の母急逝さる」 1ページ日

Edo Letter